

四旬節第三主日

2011.3.27

ヨハネ 4・5-15,19b-26,40-42

また一週間が過ぎ、私たちはここに集ってともにミサをささげています。ミサはいつもの通りのミサですが、あの日以来、私たちがささげるミサは大きく変わったはずです。変わらないとしたら、私たちは本当にはミサに参加していないのです。連日報道される被災地の方々の姿を目にしながら、ミサがいつものとおり終わるとしたら、私たちのミサは何なのでしょう。

被災地の方々の大きな悲しみと苦しみに心を痛めながらも、多くの私たちは日常の営みから手を離すわけにはゆきません。私たちの日常の生活には、それぞれに面倒なことが待ち受けています。災害の直接の被害を免れた私たちの日常の心は、被災地の方々への思いと日常の生活との間で引き裂かれ、混乱に陥っています。そのような私たちにとってこのミサは、イエスはその側で水を求められた深い井戸のようです。このミサで私たちがささげる祈りは、その深い井戸の底から水を汲み上げる桶のようです。私たちの祈りの桶は、被災地の方々の大きな悲しみと苦しみの水面にまで達していなければなりません。今回ほど、私たちのミサが何であり、私たちの祈りが何であるのか、痛切に分かったことはなかったことかもしれません。

私たちのミサは、この地上に生きる全ての人の悲しみと苦しみの底に降り立たれた神の子イエス・キリストの十字架のいけにえを記念するものです。そしてその記念のミサは、それがささげられるたびに、イエスのあの十字架において示されていることの全てを私たちにもたらすのです。私たちが今日もこのミサで被災地の方々のために祈る前に、十字架のイエスは悲しみと苦しみの中に投げ出された方々の中に立っておられるのです。私たちの手元の祈りの桶は、あの悲惨な現場にあって、十字架のイエスがともにいてくださる人々の、深い悲しみと苦しみの井戸の底にまで降りてゆかなければならないのです。

けれども、肉のからだの拘束の中に生きる私たちは、自分が生きる現場を越えて、大きな悲しみと苦しみの中にある人々と、祈りにおいても結ばれることに困難を感じます。私たちは自分のことを祈るようには、苦しみの中にある人たちのために祈れていないことを自分のうちに感じてしまいます。祈っている自分と、自分が祈っている人たちの間に越えがたい距離があることを感じてしまいます。そのような私たちにイエスは、サマリアの婦人に語りかけられたように、呼びかけてくださるのです。

「神は霊である。だから神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」今日の福音のこのみことばは、普段の私たちにはその意味が理解

できないでいた、みことばのひとつであったかもしれません。けれども、今このような状況に置かれた私たちには、このみことばが少しは理解できるようになったのではないのでしょうか。祈りは確かに私たちがささげるものです。けれども、私たちがどんなに心を動かされ、心をこめて祈っても、肉の限界をもつ私たちの祈りには、肉の限界が付きまとうのです。祈っている自分と、自分が祈っている人たちとの間の距離を、私たちの祈りによっては埋めきれないことを感じてしまいます。「神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」とのみことばは、私たちが祈るときに何を願わなければならないかを示しています。

私たちの祈りが人間としての善意や同情を超えて、真に祈りとなるためには、私たちの祈りにおいて聖霊が働いてくださらなければならないのです。聖霊はイエスと御父とを結んでいる神のいのちの霊です。神の子であるイエスが私たちと同じ一人の人間となって、私たちの世界の悲しみと苦しみの底の底に来てくださり、十字架の上で、「わが神、わが神なぜわたしを見捨てられたのですか」と叫んでくださったことによって、この世のわたしたちの悲しみと苦しみの底の底に父なる神に通じる、神の子イエスの悲痛な叫びとなったのです。イエスのあの叫びが御父のもとに届く叫びであったことを、私たちはイエスの復活によって知らされたのです。そのようにして、私たちの悲しみと苦しみの底から汲み上げられた祈りは、イエスの十字架の死と復活によって開かれた神のいのちの霊、聖霊に結ばれて、私たちの限界を突き破る祈りとなる可能性が与えられたのです。イエスの死と復活に与る洗礼の恵みを受けた私たちの祈りは、神の子らとされた私たちの中に働く聖霊による祈りとされたのです。キリスト者としての私たちがいただいている、そのような恵みと使命の自覚をもって、今日もこのミサをささげて、大きな悲しみと苦しみの渦の中に巻き込まれている方々のために祈りたいと思います。

私たちがささげるミサの中に、私たちが信じているイエス・キリストが現存してくださることを、洗礼を受けてカトリックの信者となった私たちは信じています。ミサはイエス・キリストの十字架の死と復活を記念する教会の祈りです。「わたしの記念としてこれを行いなさい。」とのイエスの遺言に基づいてミサがささげられるたびに、十字架の上で私たちのためにそのいのちを与え尽くしてくださったイエス、十字架の死を超えて復活されたイエスが、今ここに、私たちの中に現存しておられることを私たちは信仰によって受け止めています。それゆえに私たちはミサの度ごとにいただく聖体のパンを、私たちのために与えられたイエスのいのちのからだとしていただいているのです。それによってイエスを生かしていた神のいのちの霊は、イエスの聖体を通して私たち

に注ぎ込まれているのです。このような信仰によって開かれた神からの真理と霊に促されて、私たちはミサにおいてイエスのいのちと結ばれ、イエスとともに私たちの全てを父なる神にささげて、この世の全ての人々のために祈るのです。そのような祈りをささげることが出来ることが、カトリック信者となった私たちに与えられている恵みであり使命であるのです。

このミサの中で私たちの中に現存しておられるイエスは、あの十字架の上でそうであったように、今も、この世の悲しみと苦しみの中にある全ての人の悲しみと苦しみを背負って、その人々の真ん中に十字架のイエス、復活のイエスとしてともにいてくださるのです。私たちのささげるミサの中に現存し、同時に、悲しみと苦しみのさなかにある人々とともにいてくださるイエスの現存が信仰者としての私たちと、被災地の方々を結んでいるのです。そのようにして、イエスを今も私たちの中に現存させる神のいのちの霊に信頼して、私たちのこのミサを私たちの祈りとして、今も過酷な状況の中にある全ての犠牲者の方々のためにささげたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高